

忘れ得ぬ名歌・辞世歌(二)

古藤 田 太

(会員 弥生町江良)

(1) 若山 牧水

幾山河越え去り行かば寂しさの

終てなむ国ぞ今日も旅ゆく

本名繁、宮崎県東臼杵郡に生まれ、早大英文科卒、尾上柴舟門下、歌集「別離」によって認められた。自然に親しみ、牧水調という歌風で広く知られる。伊豆の沼津市道町に家を建て、住む。

歌人牧水の特徴は「大酒と旅行の多さ」であった。揮毫会の無理も重なり、昭和三年六月十七日死去。四十三才であった。

牧水の歌碑は全国に四十三基もあるというが、この幾山河の歌碑が一番多いという。

(2) 大石 良雄

あら楽や思は霽るる身は捨つる

浮世の月にかかる雲なし

元禄十五年十二月十五日今日の午前四時、大石内蔵助指揮のもと表門隊二十三名、裏門隊二十四名は突入。

奮戦二時間、上野介は間十次郎はなせの一番槍、武林唯七の一番太刀に引きずり出され、内蔵助は「我ら浅野内匠頭の旧臣ども亡主の意趣をうけ鬱憤うっぴんを散ぜんため、只今首級を申し受けます」と名乗って自らもとどめの一刀を刺し、間十次郎に首を打たせた。

やがて一同は打ち揃って泉楽寺に引き揚げ、亡君の墓前に上野介の首級を供えて無念の怨みを晴らした。

「あら楽や思は霽るる」の歌はこの時のものだろうか。

一同は大目付仙石伯耆守の役宅に出向き、ここで四家にお預けの沙汰を聞いた。

明けて元禄十六年二月四日、幕府より荒木十右衛門、久永内記の二名が上使として来たり、内蔵助一同に切腹申付の沙汰があった。

夕刻五時頃大石良雄は切腹の座に着き、安場一平の介

錯により相果てた。

長男主税は父と共に討入り、二月四日松平隠岐守邸で切腹。

長女くうは元禄十五年四月頃母に伴われて但馬の石東家へ移り、父良雄が切腹の時は十二才であったが、宝永元年十五才で病没。

次男吉千代は石東一門の計らいで出家し、祖鍊元快と改めひたすら還俗できる日を待ったが、宝永六年三月病没、十九才。

次女ルリは父の切腹の際は五才であったが、正徳三年弟の大三郎が広島浅野家へ引き取られる時、共に広島へ移り、翌年浅野安芸守の命により、浅野家一門で番頭千石取りの浅野監物けんぶつに嫁し、二男四女を儲けた。

三男大三郎は元禄十五年七月五日、但馬豊岡で生まれた。母の胎内にいるとき但馬へ移ったため、父内蔵助の顔を見ない佝成人。幼い頃は父と兄が仇討をしたため、累の及ぶことを恐れ丹後の眼科医に養子にやられたが、後石東家に引き取られ、宝永六年の大赦によって赦免となった。

正徳三年、十二才の時、広島藩主浅野安芸守吉良よ

り、石東の主人京極甲斐守へ大三郎良恭よしやすを引き取りたいと所望があり、二の丸に屋敷を賜り、父内蔵助と同高の千五百石をもって召し抱えられ、後には番頭として仕えた。これは芸州侯が良雄が赤穂浅野家に尽して呉れた忠義の心に酬いられた処置といわれる。大三郎は明和七年六十九才で没したが、その子孫は連綿として続いている。良雄の妻リクは良雄の死後香林院と名乗り、大三郎が広島へ召し抱えになる際同行し、隠居料百石を頂き、幸福な生涯を送った。広島へ移り二十三年目に六十八才を以て永眠。国泰寺に葬られた。

(3) 石川啄木

夕川に葦は枯れたり血にまどう

民の叫びのなど悲しきや

古川市兵衛の経営する栃木県内の足尾銅山は、度重なる渡良瀬川の氾濫で、広大な範囲にわたり人的損傷、多大なる農作物被害を被った。政府の善処を求むる声は広く沸き起った。

古川市兵衛夫人は、世論の厳しさに投身自殺をする有様であった。衆議院議員であった田中正造は大衆に押さ

れ、厳しく政府の責任を議会で叫び続けたが、政府はこれに応じようとしなかった。

正造は国会議員を辞し、この問題は直訴の外なし、として明治三十四年十二月、陛下の車前に直訴状を持って走り出たが、近衛騎兵にさえぎられ目的は達しなかった。新聞は直訴事件を大きく取り上げた。

中学生であった啄木は直訴に感激して作歌したものが「既にこの歌、大人の風あり」として私の愛唱歌の一。

(4) 野村望東尼

すみそむるひとやのまくら打つけに

叫ぶばかりの浪の音かな

野村望東は江戸末期の女流歌人であり、尊攘論者、名はもと、号は招月、向陵、福岡藩士野村貞貫の後妻であったが、夫の死後落髪して望東と称した。歌を大隈言道に学び多くの秀歌を残した。

高杉晋作、平野国臣、西郷隆盛等尊攘の志士と交遊があり、また彼等を庇護した。

慶応元年（一八六五）、福岡藩佐幕派により尊攘派処断に連座して姫島に流され、ここでの過酷な日日を綴った

ものが「姫島日記」である。

慶応二年一月、高杉晋作は奇兵隊に命じて姫島の望東尼を救出させて、長州の白石正一郎邸にかくまった。やがて三田尻に移り、慶応三年ここで病死した。歌は姫島の歌。

(5) 菊池武時(菊池氏第十二代)

故郷に今宵ばかりの命とも

知らでや人のわれを待つらむ

元弘三年（一三三三）三月、後醍醐天皇の勅詔と錦旗を奉じて決起し、少弐貞経、大友貞宗等と謀って博多探題北条英時を討たんとした。

探題英時は九州に於ける豪族や諸家の心底をうかがい知らんとする意向を以て、博多に招請した。

菊池武時はこの機会に英時を討たんとして、阿蘇惟直らと一族三百余騎を率いて博多に向かった。

三月十三日早朝討たんとすれども、少弐大友は違約して立とうとしなかった。武時は笑って言うには「天下の不当人共をたのんでこの一大事を思い立ったのが我が落度、よしよし、その人達の組せぬ戦をせられぬか」と呼

号しつづ、松原口、辻堂方面から家兵を率いて先頭に錦旗を捧げ、「我々は勅命により逆賊を討つものぞ、各々来つて着到につけよ」と呼号しつづ、櫛田浜に到り、ここで追尾して来た探題軍を撃破し、猛然と探題邸に進撃した。

必死の激戦は展開され、一時は菊池軍が有利で英時は自尽せんとする程の状況であったが、大友軍数千が英時を救わんと菊池軍の後に廻つて攻め立て、武時は腹背に敵を受け、到底敵しがたきを知ると嫡子武重を呼び、「我今、少弐、大友に出し抜かれ戦場の死に赴くも、義にかのう故、悔いず討死にせむ、汝は肥後に帰り、城を固め、兵を起し我が生前の恨みを報ぜよ」と後事を託して、故郷の妻子へと渡したものがこの一首であった。

その大意は「故郷の妻子は私の死を知らず、今か今かと待っていることだらうなあ」。

地名のルーツ

◆佐伯

佐伯市の地名の起源について、これまでいくつつか

の説があった。たとえば、佐伯豊後守居住説もその一つである。続日本紀によると、神護景雲三年（七六七）に従五位下の佐伯宿弥久良麻呂が豊後守に任命された。

豊日誌は、これに基づいて久良麻呂が穂門（ほと）、つまり佐伯地方に住んでいたのが佐伯の地名が生まれたのではないかとしている。だが、豊後守といえ、いまの県知事みたいなもの。その要職にある人が、国府のあった大分市を離れて、当時の辺地である佐伯に住んでいたとは思えない。

もし佐伯に住まねばならないとすれば、よほど特殊な事情があつたに違いない。たとえば戦乱とか。しかし、当時は平和な時代である。そして久良麻呂そのものが、四カ年の任期を無事に勤めて転任している。だから、この説には早くから疑義が出ていた。このほか、久良麻呂の一族が住みついたため、とする説も否定されている。佐伯氏の居城があつたためとする説も、大神氏の一族が佐伯に住んだために佐伯を名乗つたのであつて、これは地名の方が先行しているので問題にならない。

〔大分の地名〕・大分合同新聞へ一九七〇—一九七二〕